雨神様

流葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨神様

【コード】

N0868I

【作者名】

流葉

【あらすじ】

雨の神様、雨神様は雨の降りしきる、孤独な薬師の男が住む村へとやってきた。過去に犯した罪を背負い初めての自由な未来を掴むために……。

後悔の雨神と孤独の薬師（前書き）

生贄という話がありますが、この後は一切そいった残酷な話は
出ませんので、この後の二人を楽しみにしててください

後悔の雨神と孤独の薬師

此処はとある村の薬師が住まう古びた一軒家、男は今日も一人で黙々と薬を作っている。村のもの達からは薬草やキノコを使って怪しげな物を作っていると、気味悪がられ滅多にこの家には誰も近づかない。

「ふう、ん？雨か」

薬が上手く調合でき一息つく頃、男は家の屋根に落ちる雨粒の音に気付き、雨戸から見える雨粒の落ちる様子を見る、その表情には僅かながら寂しさのようなものがある

「何を感傷的になっっている？俺はこうして薬を作って、それを村の人에게人助けをしているじゃないか、俺の夢だった薬師になっただのに。どうして寂しいなどと思っている」

一人きりの時間がめつきり増え、独り言も日常のようなものだ。男は一人きりに飽き飽きしていたのだろう、いつもは気付かないような小さな音に気付く

「人の・・・声か？そんな馬鹿なこんな大雨の日に外を出歩く者などいるはずが無い、きつと雨のせいで感傷的になり人恋しくなっただけで聞こえた幻聴だろう」

「・・・・・・・・・・ううっ」

ビクツと男の体が震える、確かに聞こえた。だがあまりにも弱弱しい声に驚き以上に薬師として助けなければという感情が起こる。こんな雨の日に怪我でもして動けないかもしれないのだ

『ザアアー』

戸を開けると雨は予想以上にひどくなっている、声のしたほうは家の裏からだった。急いで家の裏に回ると、そこには同じ年くらいだろうか18〜19の女が木にもたれる様にして倒れている

「おいあんた大丈夫か？」

「うむ？」

女は奇妙な格好をしていた。まるで巫女のような白い服に青い蝶の模様が入っている服を着て、何よりも特徴的な空のように青い瞳とその青を薄くしたような髪をしている。

「お主雨は好きか？」

「今はそんな事どうだっていいだろ、どこか怪我をしているのか？」

「大事な事なのだ妾わいわにとつてはな」

「・・・嫌いだよ」

「そうか安心した、妾も嫌いじゃ」

「嫌いなのはよくわかったから、俺の質問に答えてくれ、どこか怪我でもしたのか？」

「ちと足を挫いた、その石に躓いてしまつてな」

女の足を見ると複雑な転び方をしたのか、左の足の付け根が大きく腫れて赤くなっている、草履は鼻緒が切れて近くに落ちていた

「これは酷いな、俺の家に入って手当てをしないと」

「手当てなぞ出来るのか？」

「いちよ薬師だからな、ほら背中に乗れ」

「しかし・・・」

「早くしろ」

女は何かを考えている様子だったが、背中に乗らないので振り返る男の目をじっと見つめてからようやく背中へと乗る。しっかりと足を持って落ちないようにして、家の中へと急ぐ。

奇妙なことに女は雨にうたれていたはずなのに少しも濡れておらず、また産子のように軽かったが男はその時それに気付かない程急いでいた。

戸を開け家に入り、女を慎重に座布団に座らせて足を見る

「なるほど良かった骨は大丈夫だな、だが強くひねって捻挫しているな。治るのにしばらくかかりそうだ。とりあえず薬で痛みと炎症を抑えて、板で固定するからじつとしておいてくれ」

「うむ分かった」

女は足を見る時まったく動じず、むしろ部屋の中を物珍しそうに見

ていた。本来ならば相手を警戒するはずが、目の前の女は少しも男の行動に警戒をしていない様子だった

「そんなに珍しいか薬師の家が？」

「うむ珍しいのう、人間とは案外面白い事を考える」

「？まあいいが、少し動くな痛いかもしれんが」

「分かった動かぬ」

薬を塗って板と包帯で足を固定する間、女はまったく動かず、治療する身としてはとても楽だった。男がふと女を見ると目が合う

「どうかしたかの？」

「妙に落ち着いているから驚いているんだ、会ったばかりの男に治療されているというのに」

「落ち着かない理由があるかの？」

「もしかしたら俺は危険かもしれないんだぞ？」

「会ったばかりなのに親切に治療までする男に、今更危険など微塵もないと思うが？それに妾

は人を見る目はあるつもりじゃ」

「そうか」

どうやら女は今の状況に危機感を抱いていないようだった、まあ男は何かをするつもりもなかったのだが……。

「よし終わったぞ」

治療をし終えた男はこの先どうするかと、思案に暮れるが何も思いつかない、仕方なく女に目をやると、治療を受けた足を見てから、さも面白そうにこちらを見返してくる

「今日はもう遅いがどうする？村に知り合いは居るのか？」

「おらんな、なあお主一人身は寂しかろう？どうじゃ妾を此処に泊めるといふのは？」

どうやら用があつて此処に来た訳ではなさそうだった、何処か常人離れた女に不安を覚えた男はすぐに首を縦に振らず、女を見る

「そつえば名前も言っていなかったの、妾は雨神あまがみというお主は？」

「俺は霧野優真きりやゆうま、見ての通り薬師だ自己紹介は済んだ。用もないの

にどうしてこのような夜更けにあんなところに居た？」

「もしも今から語るのが嘘でないと信じてくれるなら話そう」

「信じる、これでいいか？」

「では話そうかの、妾がこの世界に来た理由を・・・」

女が話す物語は一見すれば嘲笑ものだったが、真剣な様子に笑う訳にもいかず黙って聞く。女の言う話しはこうだ

昔昔、ある所に深刻な雨不足の村があった。その村には雨を呼ぶ為に生贄をする習慣があった、しかしその習慣は長い間固く禁じていた、だがとうとう生贄を出さねばならないほど雨不足は深刻になっていった。村人は生贄をくじで決めることにした

「お主はもしもこの村にこのような習慣があつたらどうするかの？」突然話を切って聞かれたが、優真はすぐに返事をした

「止めるさ、生贄で雨不足が解決するわけがない」

「やはりそう思うか・・・じゃがその村はそれ以外の方法はおるか、生贄の無意味さには気付かなかつたんじゃない？」

そう寂しそうに呟くとまた話を語り始めた

選ばれたのは一人の女、最近子供に恵まれたばかりだった。当然女に深い同情の聲が寄せられたが生贄に選ばれたのも運命と、村長は生贄を変えはしなかつた。

そしてとうとう女が生贄にされる日がやってきた。生贄の方法は村から離れた崖から飛び降りる事。涙を浮かべる人々や、女を愛する夫の激しい葛藤と悲しみがそこにはあつた。多くのものがこの日に涙していた、女は自分が死ぬのは構わないが子供と一緒に死なせるのは嫌だと泣いていたが、覚悟を決め崖へと来た。雨雲ひとつない空に憎しみを向け人々は崖から飛び降りた女に懺悔した・・・。女が飛び降りた後すすり泣く者達に、涙ではないものが頬を濡らせる

雨だ・・・

あれほど待ち望んでいた雨なのに、皆喜ぶどころか怒りしかなかった。

どうして！？どうして！？もつと早く降ってくれれば！！

その村には女の死にわびる様に長い間雨が降り続けたのだった。

「どうじゃ？どう感じた？」

「馬鹿だな、女は飛び降りる必要はなかったのに、周りの人間も馬鹿だ」

「そうじゃな、だがな一番の馬鹿は妾なのじゃ」

「お前が？どうしてだ？」

女は悔しそうに唇をかみ締め涙を流す、その涙がまるで村に降り続けた雨のようにわびているように見えた

「さつき言っただじゃろう？妾は雨神なのだ。あの村に雨を降らさなかつたのは妾」

「何を言つて？」

「妾は雨を好きなときに好きな場所で降らせられる、雨使いの神なのじゃ」

信じられなかつた、目の前の女が神様だなんて、だが女はとても嘘をついているように思えなかつた。信じたと同時に怒りが沸いてくる

「どうして雨を降らせなかつた！？そのせいで村にいた女は」

「疲れておつたのじゃ、雨を降らせるのに。毎日毎日人々の所に願いを聞き入れ降らせる事にの」

「疲れただと？神様なんだからだつたら」

「人間のお主に何が分かる！妾として休みが欲しいし、自由な時間をもちたかつたのじゃ！！」

あまりの声に怒っていたはずの優真が後ろに仰け反る

「神は自分の事を考えてはならんと言うのか？我儂など捨てよと？いやじゃ！妾も普通の女子おんなのように恋がしてみたい！！お洒落もしてみたいし美味しい物も食べてみたい！」

まさに嵐のような剣幕で優真に詰め寄ってくる雨神。青い瞳は必死に自由を求めている

「妾とてあの村で起きた悲劇に心を痛めなかつたわけではない、じやから妾は雨神としての力のほとんどを他の者に預け、二度と同じ

事が起きぬようにしてきたのじゃ」

そこまで言い切ると疲れたのか座布団に座り、一息つく

「じゃあお前はもう神様じゃないのか？」

「うむ、少しなら力も残っておるが、もう一度雨を降らせればこの身も消えてしまうの」

「じゃあ泊まっついていけ、何の力も無い奴を外には放り出せん」

「よいのか？」

雨神としての失敗に深く後悔しているのは分かったし、何よりもこんなに寂しそうな様子では放ってはおけなかった

「ありがとう妾はそなたの恩を決して忘れんぞ」

「泊めてはやるが、明日からは自分でどうするか決める。この村に住むのもいいし、別の村に行くのもいいだろう」

「難しいことは分からんが、まあ明日のことは明日にならんと分かれぬからな。では布団とやらを敷こうかの？」

「予備のがあって良かった、お前には予備のを貸してやる」

「うむ分かった」

火を消し暗くなった部屋で、少し離れた所で寝る雨神を見る。明日からどうするつもりかと気にはなったが、優真は久しぶりの孤独を感じない時間に安心し、ゆっくりと眠るのだった

こうして奇妙な出会いは終わった。過去を後悔しながら自由を求める雨神と、孤独だった薬師の優真はどんな未来を作るのだろうか。

その話はまた今度……。

後悔の雨神と孤独の薬師（後書き）

読んでくださってありがとうございます。あまり書いたことのないシリアスな話で大変でしたが、この後は明るく楽しい話になるので、良かったら続きを見ていただけると嬉しいです。

戯れの日々(前書き)

前の話からうって変わって明るい話になっています。二人のやり取りを楽しんでいただければ何よりです。わらわという漢字が変換しにくい為ひらがなですが、気にしないでいただけると嬉しいですよ。

戯れの日々

「ん？」

目を開けるとまだ朝陽も出ていない時間だった。薬師の朝は早いものだが昨日の事で余計切り詰めていたせいか、いつも以上に早く起きてしまったようだった。

「居ない・・・のか？」

昨日出した予備の布団の中には、昨日の雨神とかいう女の姿はなかった、昨日のは夢だったのかと思っただが、布団もあるし意識もすっかりしているのですぐに思い直す

「出て行ったか」

昨日は自分で決めるといったがこうも早く出て行くとは思わなかったので驚くが、それと同時に怪我の事を思い出し心配になる。大した怪我ではないとはいえ今はただの女、山犬にでも襲われたら一大事だろう

「せめて傷が治るまでいればいいものを」

急いで着替えて外に出ると、まだ太陽も出ていない頃思っていた以上に外は寒い。昨日の雨で地面もぬかるみ足を怪我しては、つらい足場になっている

「お〜い雨神、何処だ？」

もしかしたらまだ近くにいるかと声をかけるが、聞こえるのは虫の鳴く声だけ。薬師としては怪我人の心配でいてもたってもいられない気持ちになる

「どうかしたかの？」

突然真横から声をかけられ驚くが、驚いた様子に可笑しそうに鈴のように笑う雨神を見て、安心を覚える。雨神の手には夏らしい花々がある

「どこへ行っていったんだ？怪我人はおとなしくしておけ」

「わらわが心配だったのか？うふふ優真、お主案外可愛いのお」

「なっ！あのな俺は薬師だぞ？怪我人なら誰だろうと心配するのが当然だ」

「なんじゃつまらん、まあ心配させたのは謝ろうかの、すまんかった」

意外に素直な態度に戸惑いながらも、花へと目を向ける

「これか？これは優真のようなまさに花の無い者に贈ろうかと思いついてきたのじゃ」

「そうか、少し失礼に感じる言葉があったが礼は言っておく。ありがとう」

「わらわは優真に助けてもらったからの、これからも色々としてやるわ」

「なんか態度でかいなお前」

優真にとって久しぶりの会話はこんな些細な物でも、新鮮に感じられる。相手が元神様でもそれは同じ事だった

「どうかしたかの？何だか嬉しそうじゃが」

小さな優真の感情に気付いたのか雨神は、不思議そうに尋ねるが優真は大した事ではないと小さく首を振って返事をする

「早く戻ろう、一晩とはいえ足がどうなったか見たい。それにまだ外は寒いからな」

「寒いのか？わらわはこの着物を着ておるゆえ、あまり感じぬが」

「その着物神様の力でもあるのか？」

「多少はの。神が不調を感じぬようにあらゆる物から身を守らせるようにの」

「結構便利だな、まあお前は寒くなくても俺は寒い早く行くぞ」

家に戻るために歩き出そうとするが、その歩みは雨神の遠慮がちな声に止まる

「のう優真、お主先ほどわらわを呼んでいる時は雨神と呼んでおつたのに、何故今はお前なのじゃ？」

「それならお前だって」

「名前で呼んでおるぞ優真と」

確かに思い返せば先ほどから名前で呼ばれていたことに気付く、自然すぎて気付かなかったが

「分かった、だけど雨神なんて名前じゃないみたいで呼びにくいんだよ、他に名前とかはないのか？」

「あるにはあるが」

「じゃあその名前で呼ぶ、何という名だ？」

「鈴音^{すずね}じゃ、親しいものはそう呼ぶ」

「良い名前じゃないか、じゃあこれからは鈴音って呼ぶとしよう」
「うむ」

思ったよりも人間らしい名前に驚きはあったが、呼びやすかったので安心する。だが昨日会ったばかりなのに名前で呼び合っていると不思議だった

家の中に入ると鈴音は花を置き、正座で優真の前に座り真剣な顔でこちらを見て言った

「お主は昨日これからどうするか考えろと言ったであろう？」

「ああ」

「言いくいのだが此処に置いては貰えぬか？わらわには行く所がないのじゃ」

「……昨日の話を俺は信じてる、お前を知っている者がこの世界にいないのは察しがつく。また頼れる存在もない……。一人で生きる力もない」

その言葉に否定は出来ないのか、膝の上に置かれた手に力が入るのが分かった。きっと怖いのだろう

もし自分も同じ立場なら同じように感じるだろうと優真は思った

「俺はこれまで薬師としていろんな村に行ったが、お前のような境遇の者が多く飢え死に病気で死ぬのを見てきた。だからこそお前は見捨てないし死なせるつもりもない」

「ではよいのか!？」

「ああ、ただし自分の食い扱いは自分で取るんだ、それ以外なら協力出来るだろう」

「もちろんだ優真に甘えすぎるつもりはない、感謝するぞ！」

何を思ったのか鈴音は感謝の言葉とともに抱きついてくる、人と話す事もあまりないというのにこのように触れられる経験が少ない優真は、思わず顔を赤くしてしまう

「ん？もしかやテレておるのか？お主やはり可愛いのう」

「っ！離れる早く！！」

「分かった分かった、ふむもしや女子と触れ合ったことがないのか？」

にやついた表情を隠しもせず鈴音は尋ねる、優真にとって否定しきれないのがつらい所だ

「やはり断るか」

「それだけは勘弁にしておくれやす」

「こつという時だけしおらしい態度を見せるな、卑怯ではないか冗談だ冗談」

「やはり優しいのう、結構もてるタイプではないかお主？」

「残念ながら、そのような事はないな」

この方そんな事はなかったので、苦虫を潰したように顔をしかめるが、何が楽しいのか鈴音は笑ってその表情を見ている

「おつと、そろそろ薬を取りに来る頃だな」

「来る？誰の事じゃ？」

「ガラッ」

「すいません優真さんお薬を取りに・・・えっ！？」

扉を開けたのは村長の一人娘香奈枝だった、彼女が驚くのも無理はないいつも他人を寄せ付けられない優真が、村で見たこともない女と会話しているのだから

「確かこれだったね？どうぞ少し多めに作っておいたから」

人とあまり話さない優真もいつも明るい香奈枝とは普通に話せた。だからこそ薬などを渡すのは大抵彼女を通してだった。

「はっはい」

一瞬手渡された物が薬だと気付かないほど香奈枝は動揺していた、

その証拠に彼女が次に発した言葉は言われた当人らが困惑するものだった

「おつおめでとうございます御結婚」

「結婚？誰か結婚なさるんですか？」

優真はいつもの香奈枝らしくない様子に首をかしげて聞く

「えっ？その方と結婚されたんじゃ？」

彼女の視線の先には今の状況についていけず、不思議そうにしている鈴音がいる

「俺と鈴音が結婚？いやそういうわけだは」

「でも一緒の部屋でその・・・一緒にいたんですよね？」

確かに部屋の中には布団が二つ、香奈枝が結婚とまではいかないが事実をついているのは確かだった

「これは違うんです、鈴音は昨日雨の中ケガをして倒れていたのだから仕方なくつれてきたからで」

「何を言っておる？優真がわらわを此処に連れてきたんじゃろ？」

「おまえは余計なことを言うな！あのやましいことはないですから、香奈枝さん？」

「優真さんのばかあ！少しは期待してたのに」

そう言い残して顔を赤くした香奈枝は村の方へと走り去ってしまう、その後姿を見て優真は後ろにいる鈴音に気付かれないように大きなため息をつくのだった・・・。

優真がため息をついている頃、優真の家から遠ざかる香奈枝は心がチクツと痛むのを我慢して走っていた、どうしてもさっきの女の人の顔が頭にこびりついて離れなかった。それが嫌で忘れたくて走り続ける

「おつ香奈枝ちゃん、どうしたんだい慌てて？」

「慌ててなんかいません！」

「おつ！すまん」

高野さんは近所に私が小さい頃から住んでいて、いろいろとお世話

になっっているのだが今日は話す気にはなれなかった。だって前々から気になり始めていた異性が見知らぬ女性を部屋に連れ込んだのだ。「ひどいです優真さん、ううっ私これからどうしよう」

手に薬は持っていないきつと置いてきてしまったのだろう、戻らないといけないそれを考えると無性に気が沈んでしまっ、気持ち奮い立たせて優真の家に歩き出す、だが歩き出すと前の方から誰かが走ってくるのが見えた優真だ

「香奈枝ちゃんごめんさつきは、これ忘れていった薬ね」

「あつ、はい・・・」

目も合わせられない自分のした事が恥ずかしくて、きつと顔は真っ赤になっっているだろう

「本当に何も無かったから、嘘じゃないから」

「分かりました優真さんを信じます、でもあの方向処の方ですか？」

「えつと山を越えてこの村に来た旅の人だから、俺もよく分かんないな」

「旅のお方ですか・・・では歓迎の準備を村長さんにお伝えしますね」
そう言った直後優真はあからさまに顔をしかめる、人が大勢集まる中に行くのを想像してしまっただからそれが分かった香奈枝も、自分の失言に気付く

「あの大丈夫ですよ私が旅の方を連れて行きますから、優真さんは村長さんにだけ会ってくださいます？」

「はい」

それならと渋々了解して二人は別れた、優真は家に入るなり驚愕に目を見開く

「なっ何してる！？お前」

「ん？歓迎会なのじゃろう？優真に服を見繕っておるのじゃ」

「あんな俺は歓迎会なんかにはでないし、そんな服を着る気もない
というかその布どうした？」

「先程村人がやって来ての日頃の感謝だと置いていったぞ？」

俺は少しずつ自分の周りが変わっていくのに不安と小さな喜びを感じ

じ、そつとため息をこぼすのだった

戯れの日々（後書き）

二人が少しずつお互いの事を知り始めた二人は、この先どんな未来を作っていくのでしょうか？神様と人間の戯れ楽しんでいただけなら嬉しいです。

終わり方はもう決めてあるので楽しみにしててください

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0868i/>

雨神様

2010年11月11日23時03分発行